

令和2年度

\*\*\*\*\*  
福祉作文コンクール入選作文集  
\*\*\*\*\*

令和2年度  
福祉作文コンクール入選作文集

令和2年11月  
社会福祉法人久慈市社会福祉協議会

〒028-0014  
久慈市旭町7-127-3  
TEL 0194-53-3380  
FAX 0194-52-7715

社会福祉法人 久慈市社会福祉協議会

この作文集は共同募金助成金の一部をあてて作成しました。

# 目次

## 小学校低学年

最優秀作 ぼ金の取り組み ..... 久慈小学校 三年 大畑沙月 ..... 1

## 小学校高学年

最優秀作 病気やしょうがいについて ..... 長内小学校 五年 赤坂蒼太 ..... 3

優秀作 家族のこと ..... 長内小学校 五年 鹿糠瑛太 ..... 4

佳作 みんながくらしやすい町づくり ..... 長内小学校 五年 川畑彩音 ..... 5

佳作 人と人が助け合う町 ..... 小久慈小学校 四年 前川あかり ..... 7

佳作 こんな町になればいいな ..... 小久慈小学校 四年 柏木颯真 ..... 8

中 学 校

最優秀作	つながりが生む「幸せ」	久慈中学校	三年	間	峠	紫	帆	9
優秀作	障害を持つ人との関わりの正解とは	三崎中学校	二年	小	袖	七	彩	10
佳 作	福祉について	久慈中学校	三年	小	田	彩	乃	12
佳 作	幸せへの第一歩	大川目中学校	二年	野	里	真	心	13

高 等 学 校

最優秀作	すべての人の福祉	久慈東高校	二年	田	谷	楓	15	
佳 作	介護の課題と福祉について考えたこと	久慈東高校	二年	佐	京	輝	16	
佳 作	虐待の事実	久慈東高校	二年	三	上	月	碧	18
佳 作	未来を担う子どもの障がいについて	久慈東高校	二年	菅	原	美	里	19

審査委員の感想

応募者・入選者

実施要項

審査委員

# 小学校低学年の部

\*最優秀作



最優秀作

## ぼ金の取り組み

久慈小学校 三年

大畑沙月

わたしは、お店や町中に行く時には、大体自分のお金を持って行きます。それはぼ金をするためです。東日本大震災などでも自分の生まれた町に住むことのできない人もいたり、お金がない不自由な人がいると聞いたりしています。そのような方々にとどくようにぼ金をしています。ある日、ぼ金ぼこがあるってその中に十円玉を入れようと思いました。すると、中には五百円玉が入っているのに気がきました。わたしは、五百円も入れる人がいるのだと思い、とてもおどろきました。なぜなら、五百円玉は小ぜいの中でも一番高いからです。そしてわたしは、こまっている他の人の事を考えて、大きなお金を入れてある人がいる事を知ってすごいなと思いました。

その事を知ってからわたしは、少しのお金でもぼ金をする取り組みをはじめることになりました。自分のやった取り組みは一人勉強ノートや日記などに細かくメモをしていて、いつでも取り組みが分かるようにしています。わたしは火事、つなみ、お金の足りない日常生活をしている人の気持ちはよく知らないけ

れど、その人たちがお金などをもらったことで少しでも笑顔になつてくれるように、これからもずっとぼ金の取り組みを続けていきたいと思っています。そして、そのような取り組みを通して、少しでもこまっている人たちの気持ちが分かるようになりたいです。そして次からは、ノートなどに取り組みをまとめるだけではなく、思ったことなどをたくさん書いていこうと思います。





# 小学校高学年の部

\* 最優秀作

\* 優秀作

\* 佳作





## 病氣やしもうがいについて

長内小学校 五年

赤坂蒼太

ぼくは、四年生のときに、障がい者についての体験をしました。そのとき、障がいのある人の大変さが分かりました。ぼくは、実際に障がい者と関わったことはほとんどありませんが、障がいについての体験をしながら、おばあちゃんのことを頭にくかびました。障がい者ではありませんが、ぼくのおばあちゃんも、認知症です。生活に不自由さがかかっている点では、障がいも病気も同じだと思います。ぼくは、障がいや、病気について、あまり知っていることはありませんでした。おばあちゃんにもっと長生きしてほしいのですが、今のぼくに何ができるか、分かりませんでした。

ぼくのおばあちゃんは、とてもきびしい人でした。ぼくが、その場にふさわしくない行動をすると、ものすごくおこります。でも、ぼくのたん生日に、ほしかったゲームを買ってくれたり、学校で使うティッシュケースなどを作ってくれたりしました。そんな、やさしいおばあちゃんが大好きです。

ぼくが、三年生になったある日、お母さんから、おばあちゃん

んが認知症になったことを伝えられました。

「なんで、なんで、なんで。」

自然となみだが出てきました。ぼくは、そのことを全く受け入れられず、その日は、まったくねむれませんでした。

その後、しばらくして、おばあちゃんの家に行く機会がありました。おばあちゃんは、ぼくのことをおぼえていませんでした。知らず知らずのうちに、症状がかなり進んでいたようです。ぼくは、ものすごくショックでした。それと同時に、認知症という病気がにくらしく思いました。おばあちゃんの命が、うばわれるような気がして。おばあちゃんとの大切な思い出も、うばわれるような気がして。

今、おばあちゃんは入院をしています。認知症だけではなく、とうとう病をわずらっています。さらに、最近では年のせいか、歩くことができなくなり、車いすに乗っています。会うたびにどんどん変わっていくおばあちゃんの様子を見ていると、とても悲しい気持ちになります。ぼくは、おばあちゃんのためにしてあげられることを考えました。

一つ目は、やさしくせつすることです。おばあちゃんがぼくのことを忘れてしまったのはショックですが、いちばん辛いのはおばあちゃん自身だと思います。忘れたことをせめたりせず、思いやりをもってせつしていきたいです。

二つ目は、みんなで支えることです。はなれて住むおばあちゃんを、家族みんなで支えてきました。今は、病院の方々にも支えられています。一人で支えることは難しいので、たくさん

の人で支えることが必要だと思いました。  
これからは、ぼくもできることをしていきたいです。少しで  
も、長生きしてほしいので。



優 秀 作

## 家族のこと

長内小学校 五年

鹿<sup>か</sup> 糠<sup>ぬか</sup> 瑛<sup>えい</sup> 太<sup>た</sup>

ぼくのひいおじいちゃんは、認知症でした。一緒にくらし  
みて、いろいろな変化がみられました。いきなり病気が進むの  
ではなく、何年かかけて、生活に困ったことが出てきました。  
まず、いつも使っている時計やめがねがないと言うなど、物  
忘れの症状が出てきました。そのころはまだ、ひいおじいちゃ  
んも、自分で見つける元気があったので、まさか認知症になっ  
ているなんて思いませんでした。しかし、月日がたつにつれ、  
症状は進んでいきました。自分が物をなくしたことを、家族の  
せいにするようになりました。

「お前がとつただろう。」

などと、お母さんに言ったりするようになりました。それを聞  
いて、ぼくはショックでした。だんだん家族のふん囲気も悪く  
なり、どうしていいのかわかりませんでした。このことを解決  
するために、なくした物を一緒に探すことにしました。そうす  
ると、少しやさしくなった気がしました。

次に、車の運転が危険になってきました。元気だったころ

は、運転が上手でドライブが好きだったひいおじいちゃん。でも、八十五才を過ぎたあたりから、危険な運転が時々見られるようになりました。

ある日、車で歩道を走ってしまう事件がありました。たまたま通りかかった方が警察に通報し、注意を受けたそうです。幸いにも事故は起こりませんでした。誰かをひいてしまうなどの大きな事故につながらなくてほっとしました。家族としては、運転免許証を返納してほしかったのですが、本人はなかなか納得してくれませんでした。そこで、車の代わりに「ラクター」という乗り物を買ってあげました。予想以上に気に入ってくれて、それに乗ってくれるようになりました。とても安心しました。

ひいおじいちゃんが八十八才になったころ、食欲がなくなり、入院してしまいました。三か月ほどして、退院してきたひいおじいちゃんは、やせて小さくなっていました。それだけでなく、身の回りのことが自分ではできなくなり、ひたすら一日中、家の周りを歩き続ける状態が続きました。家族のことも忘れてしまい、とてもまどいました。

ほどなくして、また入院することになりました。そして、昨年、九十才で亡くなりました。家に戻ってきたひいおじいちゃんは、さらに小さくなっていました。でも、たくさんの人がお別れに来てくださり、みんなから愛された人だったのだと実感しました。

認知症は、本人が一番辛く苦しい病気なのだと思います。ひ

いおじいちゃんとかかわりを通して、家族だけでなく、施設や病院の方々など、たくさんの方の助けが必要だと思いました。

佳  
作

## みんながくらしやすい町づくり

長内小学校 五年

川<sup>かわ</sup> 畑<sup>はた</sup> 彩<sup>あや</sup> 音<sup>ね</sup>

わたしは、みんながくらしやすい町づくりについて考えました。分からないこともたくさんあったので、特に障がいについて調べてみました。

一つ目は、目の不自由な人についてです。目の不自由な人は、視野があまり広くないので、周りが見えず、ふつうに歩くとぶつかってしまうこともあります。ぶつからないために、白じょうというつえを使って、周りにあるものを確認します。また、何か分からないときは、点字やしるしのようなものをさわって確認したりもします。

二つ目は、耳の不自由な人についてです。耳の不自由な人

は、ふつうに話しても何も聞こえません。その時は、手話などを使って会話をしたりします。また、人によってコミュニケーションの方法がちがう場合があります。ゆっくり話す、近づいて話す、紙に書くなどの方法もあります。また、ほちようきを使っている場合は、音が大きくなりすぎないように、ふつうの声でよいそうです。大切なことは、その人の事情をしっかりと聞いて、何をしたら分かるか確かめることだと思います。

三つ目は、足の不自由な人についてです。足の不自由な人は、松葉づえや車いすなどを使うことがあります。でも、階段などで体が不安定になることがあると思います。そんなときは、かたをかしたりするなどのサポートがよいそうです。立ったり座ったりするのも大変だと思います。そんなときにもサポートしてあげたらいいようです。また、車のちゆう車場によく、体の不自由な人のためのスペースがあります。いつそこを車いすの人が使うか分からないので、ふつうの車をそこに置かないようにしたいと思います。それから、足が不自由だからといって、何から何までする必要はないそうです。車いすを自分で動かすことができる人もいます。自分がそのような人のために何ができるか、どのくらいしたらよいかを、しっかりと聞いてあげることが大切だと思います。

障がいについて調べていく中で、バリアフリーについても知ることができました。階段の段差など、障がいのある人などにとって不慣れな場所もありますが、それがエスカレーターやスロープだったら、のぼりやすくなると思います。このようなバリア

フリーが町中にもっと広がってほしいです。

私ができることについても、一つ考えてみました。一つ目は、じゃまになるようなものを置かないことです。きちんと整理しておけば、みんなにとってよいと思います。二つ目は、相手の意見をしっかりと聞いてあげることです。そのうえで、自分にできることはする、必要以上のことはほしくないことが、大切だと思います。私も、みんながくらしやすい町にするために、まず自分のことからやってみようと思います。



## 人と人が助け合う町

小久慈小学校四年

前まえ川かわあかり

みなさんは、キャップハンディ体験をしたことがありますか。わたしはキャップハンディ体験を通して、「久慈市が人と人が助け合う町」になればいいなと考えました。「人と人が助け合う町」になれば、助けてもらった人も助けた人もどちらもあたたかい気持ちになると思ったからです。

キャップハンディ体験の中で行った白杖体験を通して「助け合う町」を考えるきっかけが四つ見つかりました。

一つ目は、階段を上がり下がりしてみて思いました。階段を前にした時に「もう少しで階段ですよ。」などの声をかけることで目が見えない人には、大きな助けになると思いました。

二つ目は、自分が本当に目が悪かったらと考えたらこわくなりました。だからこそ助けがあつたらいいなと思えました。やさしく声をかけて助けてあげられたらなとも思いました。

三つ目は、「左ですよ。右ですよ。」

と言うだけではなく、「どこへ行きたいですか。」「具合悪くないですか。」など、詳しく聞くことが大切だと思いました。

それが、少しでも安心感を持たせることにつながると思いました。

四つ目は、白杖を使っているも周りにぶつかることがあつたり、転んだりしてしまうことがよくあることを教わりました。私もやってみて、人にぶつかってしまったって、目が悪い人が歩くのは本当に大変なことだと感じました。そんな時、友達の一声がとても安心感につながりました。目が悪い人は、いろいろな音や声を頼りにがんばって生活していると気が付きました。それだけではなく、こわい思いもたくさんしているのだろうなと思いました。

だからこそ誰もが安心して暮らせるように「人と人が助け合う町」を作っていきたいと思いました。



## こんな町になればいいな

小久慈小学校 四年

柏木 楓真

ぼくは少しでも、体が不自由な人が、ゆうせんされて、安全に楽にすごせる場所と、おこらずにやさしくせつする人がふえればすごくいいと思いました。

なぜそう思ったかの理由が三つあります。一つ目は、人のことについてです。にん知症の人は、自分が話した事や、今いる場所をわすれてしまいます。そのときに、周りの人がいそがせたり、おこったりしてしまうと、にん知症の人は、パニックになってしまいます。みなさんがにん知症の人の立場になったら、何もしていかないのに、いきなりおこられたかんかくだからです。二つ目は、安全で楽な場所のことについてです。目が見えない人は、かいだんで少しつまずけは、ころんで、大きなけがにつながると思ったので、平らで、自動で動く坂をせつちすればいいと思ったからです。三つ目は、同じく安全で楽な場所についてです。車いすでは、自由に動くことができません。とくにかいだんはのぼれません。そこでスロープという坂をいろいろな場所にせつちすればいいと思ったからです。

考えるきっかけになった出来事は、学校での体験やこうぎです。体験では、白杖体験と車いす体験をしました。白杖体験では、目かくしをして階段のぼりおりをしました。とてもこわかったです。目が見えない人は、毎日の生活も、安心、安全とは、いいきれません。でも、白杖というつえがあれば、何かにあたっていることや物などのかんかくが伝わって物があるかわかります。そして、町で白いつえを持っている人を見かけたりしたら、やさしい心で目が見えない人に道をゆずったりしてあげるといいと教わりました。車いすの人も同じで、道をあけてあげるといいと思います。にん知症の人が、身近な場所にいたら、「うしろから声をかけない」「おこらない」「いそがせない」の「三つのない」を守りながら、コミュニケーションをとるとにん知症の人もうれしいと思います。そして、この小久慈小学校には、ピクトグラムというマークや、ひねると水が出るじゃぐちなどのユニバーサルデザインがありました。

このような理由で、ぼくは体が不自由な人ができるだけゆうせんされて、安全に楽にすごせる場所や人がいると、久慈市はもっとえがおがあふれる町になると思いました。

中  
学  
校  
の  
部

\* 最  
優  
秀  
作

\* 優  
秀  
作

\* 佳  
作





## つながりが生む「幸せ」

久慈中学校 三年

間<sup>ま</sup> 峠<sup>とがげ</sup> 紫<sup>し</sup> 帆<sup>ほ</sup>

私たちは、世界中の人とつながっている。そう言われても、ピンとこない人がほとんどだと思う。しかし、人とつながっているということを感じること、幸せや安心感が生まれると考えている。

今、世界では新型コロナウイルスが流行しており、大変不安定な世の中である。このような世の中だからこそ、人とのつながりが大切になるのではないだろうか。

去年の台風十九号で、私たちは被災した。川がはらんし、たくさんの方が浸水した。私たちは、被災した方のボランティアに行くことになった。はじめは、どこか遠足気分なところもあり、友達と活動するというのに、ワクワクしている自分もいた。しかし、被災した地域へ行くと、その気持ちはふきとんだ。まわりには泥がたくさんあり、歩くのも大変だった。ボランティアをするお宅へ行くところにはお婆さんが住んでいた。泥を外に出すという作業はとても腰が痛くなり、これを一人でやるのは大変だと思った。帰るときには、私たちは疲れ果てて

いた。しかし、お婆さんが「ありがとう。助かったよ。」と言ってくださり、私は「また来てお手伝いしたいな」と思った。どんなに疲れていても、声をかけてもらうことで元気になるということ、身をもって感じた。また、少しの力だけでも役に立てたことをすごく嬉しく感じた。

また、私は教科書で東日本大震災のとき、中学生が子どもの手をとったりして地域の人と一緒に避難し、全員逃げることができた話を知った。この話も、地域の人のつながりがなければ、全員で逃げることはできなかっただろう。人と人とのつながりが地域へと広がっていき、大きな力になっていくんだと感じた。

しかし私は、人と話すことが苦手だ。そう感じている人も、少なくはないと思う。しかし、いざというときのためにも、今のうちから地域の人の、近所の人と交流があった方がよいと思う。

さらに、日本では今高齢者が増加している。それにつれて、一人で暮らす方もどんどん増えてきている。インターネットによると、家族以外の人と交流をしている人は約六割と、半分ほどしかない。残りの人は、近所や地域の人たちとあまり関わらずに生活しているのだろうか。そういう方が地域と関わり、つながっていくことで高齢者も生きがいを感じ、日々を幸せに住ごすことができるのではないかと考えた。高齢者が増えている中、挨拶などの声かけが少しでもあると、高齢者だけではなく、まわりの人も幸せにすることができると思った。私は声を

かけるのが苦手だが、まずは挨拶から頑張ってみようと思った。私がボランティアをしたときに感じたことのように、人を幸せにできるような人になりたいと思った。

つながりがあることで、人は安心することができ、幸せを感じるができる。災害などが多い日本だからこそ、地域の人と助け合い、いざという時に備えていきたい。また、自分から挨拶を心がけ、人を幸せにできるようになりたい。久慈市にも高齢者はたくさんいるので、困っていることがあつたら助けたいと思った。

今の日本では、地域や近所の人とのつながりが少ないと思う。孤独を感じる人が多いのも、それが原因だと考えている。インターネットの普及により、生身の人との交流が減ってしまったから。私も、インターネットばかりではなく、顔を合わせて家族や友達と話したり、地域の人に挨拶などをしていきたいと思う。これから私は、つながりが生む「幸せ」を大切にして、日々を過ごしていきたい。

## 優秀作

### 障害を持つ人との関わりの正解とは

三崎中学校二年

小袖七彩

私の家がほかの家とは少し違うんだと気づいたのは、それほど前のことではない。

祖父には、私が生まれる前から障害があつた。若いころは漁師をしていて、外国まで漁をしに行っていたらしい。お金持ちで、威厳があつて、家族思いで、とにかくすごい人だったそう

だ。そんな祖父が、ある航海中、何があつたかは分からないが、船から海へ落ちたのだそう。祖父には右半身にまひが残つた。

祖父は、私が生まれた時からデイサービスに通い、家の中で杖を突いて歩いたり車いすで移動したりしていたので、これが普通のことだと思っていた。私は当たり前のように車いすを押したり着替えを手伝ったり買い物に付き添ったりした。しかし、これは普通ではないと気づいたのは、小学校三年生の時だった。

小学校の祖父母交流会で、ほかのおじいちゃん達は元気に子

どもたちと遊んで楽しんでたのだ。それを見た私は、少しだけ他の子たちに嫉妬したかもしれない。

小さいころから祖父を大好きだった。体が不自由でも楽しく会話できるし、体を動かす遊びはできなくてもオセロや将棋、パズルに付き合ってくれる。けれども、ほかのおじいちゃん達とは違うんだということに気づいた。

「祖父には手助けが必要なんだ。」

それからは、着替えを手伝う回数を増やしたり、家の中だけだった車いすの手伝いを外でもしたりするようにした。テレビや夕食、寝る時間など、祖父を優先した。けれども、できるだけ今までと同じように接するように心がけた。

ある日、祖父は入院することになった。医者は、「手術したら、すぐに元気になりますよ。」と言っていた。私も少し元気をもらったような気がした。

しかし、手術してから二カ月ほど経った頃祖父の容体が変わった。その後、別の病院に移ったのだが、もうすぐで正月、という時に亡くなってしまった。私は泣くこともできず、ただただその場に呆然と立っていた。

お葬式の後、今までの祖父との接し方を振り返ってみた。そして思ったことは、例えば体が不自由でも、趣味を楽しんだり、いろいろな人と交流したり、家族と食事したりと、普通の人と同じように過ごした時間と同じくらい、着替えを手伝ってもらったり車いすを押ししてもらったりと、手助けをしてもらいながら過ごした時間も大切な思い出となったのではないかということ

とだ。

この体験を通して、将来の職業の選択肢に「介護に関わる仕事」が加わった。

障害を持っている人とどのように接するのかは、障害の度合いによっても違ってくるだろう。しかし、大事なものは、一緒に笑顔になれることだと思う。笑顔で過ごせれば、その接し方は正解なのだと思う。



## 福祉について

久慈中学校 三年

小田彩乃

福祉とは、さいわい・幸福という意味がある。私は福祉と聞くと病院や高齢者施設が思い浮かぶ。それは、医師や看護師、看護する人達が患者さんに幸せに生きてほしいと願い精一杯努力している場だからだ。

看護体験に参加した去年、患者さんとの関わりや、病院内を見て回る体験があった。病院内はともささいなことだが、たくさんの方の幸せで溢れていた。患者と看護師の会話に見られる笑顔。家族がお見舞いに来た時の患者さんの嬉しそうな顔。とてもあたたかい場所だと感じた。

看護体験のなかに、お年寄りの人の足を洗う体験があった。私は驚いた。「自分が他人の足を洗うの？」と少し後ろめたい気持ちだった。しかしやってみると、その後ろめたさはなくなっていた。それは、顔を上げると気持ちよさそうに、嬉しそうに笑顔でありがとうと言ってくれた人がいたからだ。ここにいる方々は自分で足を洗うことができない。自分でも人の役に立てるんだととても嬉しく誇らしい気持ちになった。そしてこ

の体験は私の中で福祉のことを深く考えたいと思わせてくれた機会でもあった。

人は誰でも幸せになれる権利をもっている。体の不自由な人、貧しい人、高齢者。誰もが幸せになれる権利がある。しかしどうして差別やいじめ、虐待などで他人の幸せを奪ってしまったのだろうか。

今、世界中で問題となっている新型コロナウイルス。テレビでもコロナに関してのニュースや番組が多く流れている。そのなかで私が最も衝撃をうけたのは、看護師への差別だ。なぜ人のために頑張っている人達に罵声をあびせたり、差別したりする人達がいるのだろうか。私にはとても理解ができなかった。自分ばかりたくないから、子供を守りたいからという気持ちは分かる。きっと誰しもがそうだろう。だからといって、差別をする理由にはならない。色々な差別がある日本の今の現状は福祉とは言い難い。高齢者達だけが気をつける、看護師らが気をつける、ではないと思う。一人一人が意識しなければ、この現状は変わらない。この差別のせいで、頑張っている人達が仕事を辞めなければならなくなったり、命を落としてしまうのはおかしい。皆が自分自身の意識を高め、一歩ずつ差別やいじめをなくし福祉へと近づいていくことが大切だ。

全ての人が幸せになるために、自分は何ができるのだろう。自分に関係ないと思っている人も多いと思う。しかし、自分の一言で、自分の行動で周りの人が一人、また一人と幸せになっていくかもしれない。病院内に限らず様々な場面で福祉が実現

する。他人の幸せを奪わないように、他人に幸せを与えるように。そう考えながら行動していけば、その場はどれくらいあたたかい場になるだろう。どのくらいの笑顔がうまれるだろう。福祉とはそういうことだと思う。

私は、様々な体験やニュース、人との関わりで、福祉のことを深く考えた。周りの人に幸せを与え、その幸せが広がっていく、幸せの連鎖になっていくことが私が考える最高の福祉だ。そして将来、福祉に関わる仕事に就き、最高の福祉を実現できるようにしたい。



佳作

## 幸せへの第一歩

大川目中学校二年

野里真心

「ありがとう」とは、感謝を相手に伝える為の言葉だ。けれど、私は「ありがとう」にはそれだけではない、周りを幸せにする力があると思う。

私が通う学校では、毎年近くにある養護老人ホームに全校生徒で訪問している。そこでは、合唱を披露したり、施設内の清掃をしたりして入所者の皆さんの為になるよう活動をするのだ。私は、昨年一年生だったので、初めての訪問だった。

「少しでも私達の活動を喜んでくれたら嬉しいな。」  
訪問する当日の朝はこのような気持ちでいっぱいだった。

養護老人ホームに到着すると、おじいさんや、おばあさんがここにこししながら、

「よく来てくれたね、楽しみにしていたよ。」と私達を歓迎してくださいました。

楽しみなさっていたという事を知って、合唱も清掃も頑張ろうと、より強く決心した。

到着して間もなく私達が合唱を披露する時間になった。歌う

曲は、地区の合唱交流会でも歌った「ヒカリ」、昔ながらの名曲「ふるさと」、「北国の春」、「青い山脈」の全部で四曲。私は、聞いている方に笑顔になっていただきたくて自分自身も楽しんで歌った。全ての曲が終わると、涙を流しているおばあさんが、「昔の事を思い出して…。良い歌を聞かせてくれて、ありがとう。」

とおっしゃっていた。この時私は、自分達の合唱でこんなに感動してもらえるんだと、とても嬉しい気持ちになった。そして、「ありがとう」という言葉に不思議と心がぼかぼかした。

私は、「ありがとう」には人を幸せにする力があるという事をこの時気付かされた。「どのくらい喜んでくれたんだろう。」、「今度はもっと笑顔になってほしい。」そのような事を考えるだけでわくわくしてくる言葉だ。養護老人ホームの訪問は、私に「ありがとう」の力を気付かせて下さったおばあさんに出会えてとても良い経験になったと思う。

私は、今まで沢山の人に沢山「ありがとう」と言ってもらった。その度に自然と笑顔になり、誰かの役に立てたという喜びを感じた。この喜びを多くの人と分かち合いたい。もし、世界中で今までよりも「ありがとう」と伝え合うようになったらこの世界はどう変わるのだろうか。きっと私のように幸せで満ち足りた人であふれかえるに違いない。「ありがとう」という言葉こそが、幸せな社会をつくる第一歩だ。だから私は、今日も伝える心を込めて、  
「ありがとう。」



高等学校の部

\* 最優秀作  
\* 佳作





## すべての人の福祉

久慈東高校二年

田谷

楓

福祉の作文を書くにあたって一番に思い浮かんだのは、母のことだ。私の母の幼年期はとても複雑で、何度か話を聞いたことはあったが、いつも「結局誰に育てられたの？」といった感じだった。今回初めて詳しく聞いたところ、母は両親、里親、親戚、児童養護施設など、書ききれないほど多くの人達に育ててもらったらしい。この話を聞いて私の中で一番に出てきたのは「母は可哀想な子だったんだ」という考えだった。しかし母は「両親のいる家族に憧れることもあったけれど、自分が不幸だと思ったことは一度も無い。強いて言うなら施設はおやつをお腹いっぱい食べられなかったことくらいだよ。」と笑ったのだ。私は拍子抜けしてしまった。いかにも映画やドラマにありそうな、悲劇的な話だと思っていたのに、あまりにあっけらかんと話すのでとても驚いた。母は、転々と場所を変えながら生活してきたけれど、それでも、母はどの場所でも大切に愛されて育てられたらしい。その中でも母は、児童養護施設での暮らしが長く、とても世話になったと言った。

では、私は一体何を持って母を「可哀想な子」と判断したのか。それは、児童養護施設で生きる子ども達が、親に捨てられて、生きる術を持たないために、そうしなければならなかったから。そういう先入観があったからだと思う。母は両親の離婚を機に父に引き取られたが、それはまた子どもと暮らすため、子どもを一時的に預ける選択肢を取ったということだった。父は何度も母を迎えに来たそう。私は初めて、施設がこういう事情を抱えた親子を手助けしてくれる場所でもあることを知った。母はこの話をいつもより明るく話していた。他人に先入観があることを知っているから、別に可哀想と思われることは無いと、必要以上にそう振る舞っていたように見えた。

もし、私の身近な友人に施設で生活している人がいたら、「可哀想な人なのだから、助けてあげないと。」そう思うだろう。果たしてその考えを相手は望んでいるだろうか。改めて考えると、そういう人ばかりでは無い気がする。誰だって、求めているのに腫れ物を触るみたいに扱われたら、いい気はしないだろう。幼い頃の自分の言動を振り返ると、何気なく言った言葉が、相手にとっては嫌な踏み込まれ方だった時もあったと思う。十七歳になった私は、知らなかったではもう許されないのだ。

同時に、公的扶助を利用することに特別感があってはならないと思つた。利用すべき人が、適切に使うことに抵抗があつては、苦しむ人が出てきてしまいうから。それは決してあつてはならない事だが、実際世間の目を怖がったり、公的扶助を

佳作

## 介護の課題と福祉について考えたこと

久慈東高校 二年

佐京

輝

恥ずかしいものと考え、追い詰められてしまう人もいるのだ。日本人は特に、他人と違うことを恐れ過ぎていりし、変わった家庭に線引きをする人が多いと思う。今回のように、施設Ⅱ不幸せと考えた私も、また偏見の原因だったのだ。福祉はデリケートなこと、福祉に携わる側も受ける側もとても慎重になる。だからこそ見えていないことがとても多い。この問題を解決する第一歩は「福祉を適切に理解し、現状を知る」ということ。誰も関係ない人などいなくて、知る義務があると思う。

私は正直、介護福祉系列を苦手な英語が無いからという理由で選び、将来は美容師になりたいと考えている。しかしこの系列を選んだことで、福祉について学ぶことも、こうやって作文を書くことで改めて考えることもできた。介護福祉系列を選ぶで心から良かったと思う。しかしそれは私達だけでいいのだろうか。知らないというのとはとても怖いことで、自分自身がある問題に直面したとき、手遅れになってしまうかもしれない。助けなければならぬ人を助けられないかもしれない。必要以上の「可哀想」が、一部の人達に生きづらい社会を作っているかもしれないのだ。福祉とは、幸せ。幸福。また、人々の幸福で安定した生活を公的に達成しようとする、という意味を持つ。全ての人が福祉を自分のこととして捉え、公的扶助が正しく利用される社会であってほしい。

私は、学校で介護や社会福祉について学んでいます。その中で私は、現在の介護はどのような状況なのか気になり、今まで学習してきた内容をもとに現在また今後の介護の課題にはどのようなものがあるのか自分なりに考えてみることにしました。

私が自分なりに考えた一つの目の課題は、介護従事者の人手不足です。介護従事者の人手不足は、ニュースや新聞でもよく取り上げられている話だと思えます。今まで何気なく聞いていた話ですが、地方の過疎化や少子高齢化の進行に伴い介護従事者の人手不足は今後さらに深刻な問題になると思えます。

二つ目は、介護従事者の労働状況についてです。この課題には、一つの目の介護従事者の人手不足が大きく関係していると思えます。特別養護老人ホームなどの福祉施設では、介護士よりも入居者の方が多い所がほとんどだと思えます。一人で複数人の介護を行うことはかなり大変なことだと思えます。私は、介護実習の授業を受けた日は普段の授業日よりも疲れを感じることが多いです。しかし、実際の施設では一日中介護をし、それ

を毎日のように行わなければならないため、介護従事者の負担はかなり大きいと思います。このことから、介護従事者の労働状況がこれからの介護の課題として挙げられると考えます。

三つ目は、老老介護についてです。インターネットで調べた情報によると在宅介護の内69パーセントは老老介護であるそうです。老老介護には様々な問題点があります。一つは、お互いが認知症同士で介護している場合です。このような状況では、服用している薬を飲み忘れてしまったり、飲みすぎてしまうなど様々な問題が起こります。もう一つは、介護疲れによる共倒れです。若い人でも介護をすることはとても大変だと思いません。そんな中で老人が介護を行うのは、身体的にも精神的にもかなり負担がかかると思います。このように老老介護には、他にも多くの問題があります。ですので、老老介護もこれからの介護の課題として挙げられると考えます。

このように、介護や福祉のことを六か月間学んだだけでもこれだけ多くの課題を見つけることが出来ます。また、これからより多く、より深く福祉のことを学習していく中で今回出たような課題はまだまだ出てくると思います。そして、私は、これらの課題の解決にはたくさんの方が今の介護の状況や社会福祉について理解する必要があると考えます。今は、新型コロナウイルスの影響で福祉施設のボランティアや施設の紹介など介護に興味を持ってもらえるような活動を行うことは難しいと思います。しかし、これら以外にも介護のことや福祉のことに興味を持ってもらえるような活動はあると思います。私は、

この作文に取り組んでいく中で自分にできることを考えて実際に行動にうつすことが大事だと思ようになりました。また、自分も積極的にボランティアに取り組んでいきたいと思うようにもなりました。

六か月間、介護や社会福祉のことを学んでいく中で介護士やソーシャルワーカーなど介護・福祉に関わる職業は、とても大変で辛いことが多い反面、とてもやりがいを感じられる職業だとわかりました。実際に社会福祉士として働いていた先生の話を知ったり、今まで援助したことのある方の援助方法を自分たちで考える授業などとてもためになる授業を受けることが出来ました。また、障がい者や貧困の子どもたちの様子をビデオや本などで見て、差別の実態や貧困の子どもたちの気持ちを知った時は毎回のようには驚きます。私は、介護福祉系列での授業を受けて、今まで以上に介護や福祉に携わる職業に就きたいと思うようになりました。そして、困っている人たちの手助けが出来るように今から積極的にボランティアなどに取り組んでいきたいと思えます。また、このように、介護に興味を持ったり、ボランティアに参加する人たちが増えていくような活動も行っていきたいと思いました。

## 虐待の事実

久慈東高校二年

三み上かみ月る碧あ

私は、社会問題になっている児童虐待をテーマにしました。

虐待という言葉はよく耳にするとおもいます。けれども、正式なことは分からない人もいると思います。調べることになりました。

虐待とは、親または親にかわる保護者など子どもに関わる大人が、子どもに対して不適切な扱い（たまたま起こった事故ではなく、暴力・無視）をして、子どもの成長や発達を妨げ心身ともに傷つける行為の事を言います。次に私は虐待件数や背景について調べることにしました。すると、虐待件数は年々増加し死亡事例は年間五十件を超え、一週間に一人の子どもが命を落としていくということが分かりました。そして、加害者は子どもの実母、実父が多いとされていますが実母の割合が少し高いことが分かりました。親が虐待する理由は、「望まない妊娠・出産」・「育児不安などによる精神的不安定」・「夫婦間の不仲」などがあげられます。また、被害者（虐待を受けていた人）が子どもの愛し方を分らず虐待をしてしまうという負の連鎖がもたらす虐待のケースも存在します。そのような親は虐

待を繰り返してしまふ傾向があるようです。私は、今まで虐待児は周りに助けを求めたり、親が嫌いになると思っていました。ですが、子どもは親が好きだから暴力を振るわれても周りに助けを求めない子どもが多いそうです。助けを求めていなくても私たちが目に見えないサインを見て助けてあげることが大切だと思えます。そして、みなさんに知ってほしいのが親・加害者も助けるべきだと思えます。虐待をしてしまふ親の多くは、一人で悩みを抱え込み耐えきれなくなり、その結果最悪の方向へ進んでしまふ虐待をしてしまふという悲しい現状です。

虐待してしまふ親も悩んでいます。やめたたくても怒るとかっとなつてしまふやめられない、助けてと電話相談をしてくる親もいます。よつて、ニュースを見ただけで責めたり、悪者と言わずになぜこんなことが起こつてしまつたのか、なぜ周りに助けを求められなかつたのか考えるべきだと思えます。困つている時には何も声もかけてあげず、事件が起きたら可哀想、お前が悪いと責められるのは、あまりにも親の居場所が無さすぎると思いました。しかし、虐待という行為が許されるわけではありません。きちんと反省するべきだと思えます。

そして、虐待児のその後の人生について知るべきだと思えます。虐待を受けた子どもたちには、育て直しや長期間の支援が必要となり、児童福祉施設などで育ちます。児童福祉施設には、児童養護施設、乳児院、児童自立支援施設など子どもの年齢や状況によつて決められます。しかし、十八歳になると施設を出なければなりません。施設を出たあとに、進学や就職など



で社会に出たときに支える「アフターケア」があります。幼少期に受けた虐待の影響で病気や障害を負いその影響により貧困が問題視されています。施設退所後も安心で安全な生活を送れるように見守り、支援し、生活での困った時には適切な支援機関を紹介してくれる施設は凄く助かると思います。

私は、普通の幸せな家庭で育ってきたから虐待を受けている子の気持ちが分かりません。そして、悩みを打ち明けられる友達、家族がいるから悩みを抱え込むこともありません。そのため、今まではただニュースを見て「かわいそう」としか思わず、ただ親が悪いと思っていました。でも、調べると親で苦しんでいる人がいると知って最初は驚きでした。そして、虐待について調べていると私にも何かやれることはないか、何か力になりたいと思うようになりました。すると、東京を中心にボランティア活動があることを知りました。ですが、高校生の私には東京は頻繁には行きません。そして、今はコロナウイルスの影響で東京に行こうとは思えません。だから、今は虐待に関わらず子どもに関するボランティアや募金、ゴミ拾いなどにかく地域の人や子どもたちの為に出来ることをしようと思いました。

佳作

## 未来を担う子どもへの障がいについて

久慈東高校 二年

菅原美里

私は本を読んで感じたことを書こうと思います。これは障がい児三兄弟のお話です。長男の洋平くんは、七万七千人に一人しか生まれないと重い病気を持って生まれました。生まれてからお医者さんが洋平くんの両親に伝えた言葉は衝撃的で、私はその家族のことをかわいそうだと感じました。福祉について学んでいるのにそのように感じるのには悪いと思いました。けれど、もし自分の家族が同じ状況だと考えると、やはりそういう気持ちになりました。でも、洋平くんの家族は違いました。「世の中では能力が多い人が『ふつう』のではなく、多数決みたいなものなんだ。」「人数の多い方が『ふつう』になるんだ。」「少数派が悪いのでもなく、多数派だけが正しいわけでもない。」という文を読んで、この考え方ができる人が今より沢山いれば障がいなどの偏見・差別はなくなるのではないかと思います。洋平くんのことですごく、苦しく大変でも洋平くんのことが大好きな両親は素敵な人たちだと思いました。

次男の次くんには自閉症がありました。二人も障がいを持つ

ている子どもがいるなんて大変だなと思いました。大くんはとも落ちつきがなく、動き回る子でした。そのため保育所の先生は「悪い子」「ダメな子」と言いましたが他の保育所へ行った大くんは「悪い子」でなくなりました。大くんは何一つ変わっていません。新しい保育所の先生たちの考え方が違っていただけです。障がいがあるからといって、線を引いて考えてしまうのはとても悲しいことだと思いました。新しい保育所の先生のように工夫したら障がいを持っていても生きやすくなるのに少しの工夫もせず「悪い子」と勝手に決めてしまうのは悲しいと思いました。大くんは小学校にあがって一生懸命やっていたけれど「みんなと違う」から周りの子にいじわるをされました。大くんは言い返しましたが、ガイジと言われたことに言い返せませんでした。障がい児を略してガイジだからです。私たちは普段何気なくこういった言葉を使いますが傷つかない人はいないと思います。大くんだってとても悲しいはずです。私は最初、洋平くんや大くんが障がいを持っていると言ったとき、かわいそうだと思うたけれど優しい気持ちを持ってないこのいじめっ子の方がかわいそうだと感じました。

三男の航くんは知的おくれのある自閉症でした。航くんは石を飲み込む異食行動があったり暴れたりするけれど「困った子」ではなくで「困っている子」でした。伝えたいことが自分でも分からなくて困った行動をしていたのです。航くんが困ることをなくそうとカードをつくると航くんは過ぎやすくなりました。このように少し工夫をすればみんなと同じように過ご

せるのです。でも、みんなと違うというのはそんなにいけないことなのかな。と思います。個性は認められるのに障がいは個性と違っていいのかと思います。このようなお話を読むことで障がいへの考え方が変わる気がします。「バリアフリー」だつて段差を無くすなど単純なことではなくて、実際の障がいを持つ人でないと分からないと思います。でも、分からないで終わるのではなくて、分かろうとすることが大切だと思います。障がいのある人に合わせて作られたものは障がいを持たない人だつて使いやすいはずですよ。これからもっと「バリアフリー」が増えたらいいなと思いました。

今、障がいを持つ人とふれ合ったことのない人も沢山いて、「面倒」「こわい」と思うこともあると思います。けれども、障がいのある人もない人も同じように同じ場所で過ごせたらお互いに分かり合えるのではないかと思います。実際に洋平くんや大くん、航くん三兄弟と同じ地域に住む人たちは「仲間」だと考えています。こんなふうに思いやりを持てる人になりたいと感じたし素敵なことだと思いました。洋平くんは成人を迎えることができず。いつもどこかが痛くて苦しくて辛い。選べるなら洋平くんも普通の体がいいに決まっています。でも、「もしも」を考えるより、今目の前にあることを楽しめる洋平くんや、両親、弟たちはとても強いと思いました。洋平くんのお母さんは「障がいがあっても、ま、いつか」と思っているらしいです。今、障がいについて「ま、いつか」と思える人が増えたらとても幸せな世の中になると思いました。





# 審査委員の感想

審査委員長 工藤弘毅

## ○講評（小学校低学年・小学校高学年の部・高等学校の部）

審査委員会は、六人の審査委員で小学校低学年の部から高等学校の部まで、応募者の学校名、学年、氏名を伏せた状態で、優れた作品、心に響く作品を選びました。小学校の部には、低学年の部一編、高学年の部十編の応募がありました。キャップハンディ体験をもとにした作品や、家族との関わり、自らの体験を通して考えた作品。作者自身が、感じたこと、考えたことを素直に表現した作品が多く応募してくれた皆さんの家族への思いや優しい心、暮らしやすい町づくりへの思いがしっかりと伝わってきました。

高等学校の部には四編の応募がありました。家族の体験をもとに福祉のあり方、幸福で安定した生活について考えたもの。学校で学んでいる介護について、新聞やニュースで話題になっている身近なことについて調べ、今後の方向性を模索したり、解決策の提言をしたりと高校生らしい視点で福祉について書かれた作品でした。

ただ、作品の中には、学んだこと体験したことの感想をまとめた作品も見られました。

作文は、「誰に向けて」「何を伝えたいのか」ということをはっきり意識して書くことが大切です。その中でも自分の体験や考えを具体的に書くことによって自分にしか伝えることのできない素晴らしい作文になります。

日々の生活において五感を使って多くのことを感じてほしいと思います。その中から伝えたいことを見つけて、文章表現の中で何かに例えてみたり（比喻）、なにかと比べてみたり（対比）、会話や音（擬音語）等で表現してみましよう。表現することで必ず新しい発見があり人生を豊かにしてくれます。

最後になりますが、福祉作文コンクールを通じて福祉や共生社会に関心をもつ人が増えていくことを期待します。

○講評（中学校の部）

体験は思いを生じさせ、思いを書くことは自分を見つめることにつながります。今回審査しました十九編の作品すべてが、家族や学校であった直接体験やメディアで見聞きした間接的な体験を基にして、自分の思いを書き留めたものでした。

なかでも今回最優秀に選んだ作品は、コロナ禍の社会に心配されている人とのつながりの希薄さに対し、台風被害時のボランティアを通じて得た嬉しさが解決の糸口になるのではと考え、挨拶から始めたいと決意したものです。このような自己変容が、読む人に共感を生じさせ、温かい気持ちにさせるのだと思います。

中学生の感性は鋭敏です。家族のつながり、障がいを持つ人、生徒会、いじめ、虐待、コロナとの共存、飢餓問題、人種差別、LGBTなど、様々な事象に気づきや驚き、怒り、喜びをもって接していることがわかりました。そして、テーマは「差別をなくしたい」が多く、自分たちでできることはないかを模索しているようでした。読んでいて、「がんばれ！中学生。やればできる！」という思いを強く持ちました。

体験が生じさせた思いを綴る作文には、自分を見つめると同時に、ほかの人に読んでもらうというねらいがあります。そこには、思いを正確に伝える言葉を選ぶこと、文章のわかりやすさ、多面的な見方、文章の構成、記述の丁寧さが求められてきます。そのために私たちは勉強しているのだと言っても過言ではありません。幸せな世界のために、たくさんの体験と豊かな文章表現を積み上げ、絆を確かなものにしてほしいと思います。

## 令和2年度福祉作文コンクール応募者・入選者

### ■小学校低学年の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	久慈小学校	3	おおはたさつき 大畑沙月	ぼ金の取り組み	最優秀作

### ■小学校高学年の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	小久慈小学校	4	まえかわ 前川あかり	人と人が助け合う町	佳作
2		4	きしさとめい 岸里芽衣	人々があたたかくなる世界を	
3		4	たかはりいずみ 高張泉	みんなに思いやりのある街に	
4		4	かしわぎそうま 柏木颯真	こんな町になればいいな	佳作
5		4	おおさわいちか 大澤一花	助け合う岩手県	
6		4	たなかあかね 田中茜	認知症の人にしてあげたいこと	
7	長内小学校	4	こむかいみりあ 小向未里愛	福祉出前こうざをうけて	
8		5	かぬかえいた か鹿糠瑛太	家族のこと	優秀作
9		5	かわばたあやね 川畑あや音	みんながくらしやすい町づくり	佳作
10		5	あかさかそうた 赤坂蒼太	病気やしょうがいについて	最優秀作

## ■中学校の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	長内中学校	3	下平陽人	決めた目標と祖父との思いで	
2		3	大矢瑠夏	自然災害を乗り越える	
3	三崎中学校	2	小袖七彩	障害を持つ人との関わりの正解とは	優秀作
4		3	村塚遥	一人一人が大切にされる社会へ	
5		3	坂本勇人	終息を願う	
6		3	大道美怜	今までの生活を取り戻す	
7	久慈中学校	3	根井亜弥	差別と向き合う	
8		3	窪田皓史	「差別が日常化された世界」がもしもあったら…	
9		3	大粒来遥香	小さな力が大きな力へ	
10		3	兼田楓子	当たり前	
11		3	大貫萌	幸せを願って	
12		3	間嶋紫帆	つながりが生む「幸せ」	最優秀作
13		3	小田彩乃	福祉について	佳作
14		3	石崎彩花	偏見する目を尊敬する心に	
15		3	田表日和	十人十色の愛のカタチ	
16		1	少路陽	「幸せになるために」	
17	大川目中学校	1	高谷奈々緒	私の「幸せ」理論	
18		2	馬内菜々美	一人一人の意識	
19		2	野里真心	幸せへの第一歩	佳作

## ■高等学校の部

No.	学校名	学年	氏名	題名	賞
1	久慈東高等学校	2	佐京輝	介護の課題と福祉について考えたこと	佳作
2		2	田谷楓	すべての人の福祉	最優秀作
3		2	三上月碧	虐待の事実	佳作
4		2	菅原美里	未来を担う子どもの障がいについて	佳作

# 令和2年度福祉作文コンクール実施要項

## 1 趣 旨

次代を担う小・中・高等学校の児童・生徒を対象に、福祉作文を通じて、思やりの心や助け合いの心を養い、自分たちが暮している地域への理解と関心を高めることを目的として福祉作文コンクールを実施する。

## 2 主 催

久慈市社会福祉協議会

## 3 後 援

久慈市教育委員会

## 4 募集内容

日常生活の中で感じたこと、考えたこと、体験したことなど。  
※別添資料を参考にしてください。

## 5 応募資格

市内の小学校・中学校・高等学校に在籍している児童・生徒

## 6 応募方法

### (1) 制限枚数（字数）

- ・400字詰原稿用紙を使用
- ・小学生低学年（1～3年生）2枚以内
- ・小学生高学年（4～6年生）2枚以上3枚以内
- ・中学生2枚以上4枚以内
- ・高校生5枚

### (2) 応募数

各小学校10編以内、各中学校10編以内、各高等学校10編以内

### (3) 応募先

久慈市社会福祉協議会 福祉作文コンクール係

〒028-0014 久慈市旭町7-127-3 TEL 53-3380

### (4) 応募期間

令和2年9月30日（水）必着

## 7 審 査

主催者で設置する審査委員会で決定する。

最優秀作：各部門各1編 優秀作：各部門各1編 佳作：各部門各1編以上  
審査委員会特別賞：全部門若干

## 8 入選発表

令和2年11月に入選者の在籍する学校長に通知する。

## 9 表彰

入選者へは、主催者より賞状を贈る。

## 10 その他

- (1) 応募作品は原則として返却しない。入選作品の著作権は主催者に帰属する。
- (2) 主催者において入選した作品をまとめた作文集を発行する。
- (3) 本事業は赤い羽根共同募金の助成を受けて実施する。
- (4) 最優秀作受賞者に記念品（図書カード3,000円分）を贈る。
- (5) 優秀作受賞者に記念品（図書カード2,000円分）を贈る。
- (6) 佳作受賞者に記念品（図書カード1,000円分）を贈る。
- (7) 応募者に記念品（図書カード500円分）を贈る。

### <指導にあたっての参考>

「福祉」の「福」も「祉」も幸せを意味しています。福祉というのは、すべての人が、精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力のことです。先生がたのご指導にあたっては、次のことがらなども参考にしてください。また、題名は統一させずに、個々の表現で書くようにご指導ください。

#### 募集する具体的内容は

- ◇ すごく幸せな様子と、それがどのようにしてそうなったのか。
- ◇ 恵まれていない、満たされない方々の様子から考えたこと。その方々のために何をしたいか。何をしたいか。
- ◇ お年寄りや身体の不自由な方々について、考えたこと。したこと。したいと思うこと。
- ◇ 差別やいじめについて考えたこと。
- ◇ 戦争や紛争や災害で、幸せでなくなっている方々について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
- ◇ 自然災害で体験したこと。考えたこと。
- ◇ 「福祉」について日ごろ考えていること。
- ◇ 社会問題（貧困や虐待、老老介護など）について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
- ◇ コロナウイルス等社会情勢について感じたこと

#### では、その材料は、どこからを見つけるのか？

- ◇ 家族のふれあいや、出来事の中から
- ◇ 学校や友達とのふれあいで体験したり、見たり聞いたりしたことの中から
- ◇ 近所で見聞きした出来事の中から
- ◇ 地域活動、体験活動、訪問活動、交流活動などに参加した体験の中から
- ◇ 読書体験の中から
- ◇ テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどで見聞きした中から

## 令和2年度福祉作文コンクール審査委員

職名	氏名	所属団体等
委員長	工藤弘毅	久慈拓陽支援学校長
副委員長	門前雅紀	夏井中学校長
委員	大槻桐子	久慈中学校
委員	大西香織	長内中学校
委員	高屋敷真喜子	久慈市ボランティア連絡協議会長
委員	晴山博樹	久慈市福祉事務所社会福祉課長